

シリア難民の子どもたちに教育を！ –みらいぶらりいプロジェクト–

2018年4月13日～同27日

国際医療救援部 中出雅治

2018年4月から、レバノンのパレスチナ難民支援事業として、パレスチナ難民キャンプにある5つの病院支援が、日赤とパレスチナ赤新月社の二国間事業として始まりましたが、実はもうひとつ、レバノン国内で、当院が関わっている事業があります。それが、みらいぶらりいプロジェクトです。

レバノンはシリアの西隣りにある国ですが、2011年のシリア危機以来、シリアから150万人を超える難民がレバノンに逃れてきています。レバノン自体が人口400万から600万人（国勢調査が長らく行われておらず、正確な人口は不明）の小さな国ですので、この大量の人口移動は、逃れてきたシリア難民、受け入れ側のレバノンの双方に大きな影響を与えています。

シリアから逃れてきた人々の中には当然多くの子どもが含まれているのですが、子どもたちの教育も大きな課題となっています。レバノンでは、ユニセフ等が支援して、一部の小学校を二部制にし、午前にはレバノン人の子どもたちに、午後にはシリア難民の子どもたちに授業を行っています。しかしながらこれらの学校の多くは、内戦や資金不足により、設備が整っていないとは言えません。

大阪赤十字病院国際医療救援部は、国際的な慈善団体のひとつである国際ソロプチミスト日本の中央リジョン様から、設立30周年を記念してまとまったご寄附をいただきました。このご寄附は、女性の団体であるソロプチミスト様のご意向に沿って、女性や子どもたちのための支援に使いたいと、いろいろ用途を検討していましたが、上記のレバノン国内の、シリア難民にも開放している学校の整備を行うこととなりました。

具体的には、設備の整っていない



今年度対象校の位置

学校の図書館や体育館、教室の整備や改修を、1年に3校ずつ、3年間で計9校で行う計画です。事業の正式名称は、「Safe, Peaceful and Child Friendly Public Schools for Lebanese and Syrian refugee Students」と言いますが、未来を担う子どもたちのための図書館をつくるという意味を込めて、「みらいぶらりい」プロジェクトという愛称がつけられています。

今回、初年度の対象3校のうち、北部にある Al Qobeh 学校を訪問しました。この学校は女性の校長であるサマール・ハラビ先生が 2004 年に自ら設立した学校です。この地域は、元々レバノンの中でも貧しい地区の上に、2008 年から 2014 年まで内戦が続いた地域でもあります。学校は攻撃対象ではないにもかかわらず、多くの銃弾を受けましたが、ハラビ



サマール・ハラビ校長

先生は当局や武装勢力などと粘り強く交渉を続け、学校を守り抜きました。内戦中は授業ができない時もあったり、銃撃戦の翌日に授業を再開したりした時もあったとのことで、この学校の歴史がそのままハラビ校長を主人公とした小説になりそうなくらいの話をお聞きしました。



学校の外観



一見するときれいな学校も、よく見ると壁に銃弾による無数の穴が開いています。

学校は資金不足から、当初は乏しい設備でしたが、ハラビ先生自身が駆け回り、援助団体から支援を受け、徐々に設備を整えて今に至っています。

現在この学校は、午前にはレバノン人の子どもたち、午後からシリア難民の子どもたちをそれぞれ約350人ずつ教えていますが、教室に本棚などの備品がない、校内に電気がない場所がある、など未整備な部分を今年度に整備していきます。



本棚などの備品のない教室



学校の状況を聞く